

『今日わたしと共に楽園に』

聖書 ルカによる福音書 23章 39～43節 讃美歌 16 57 107 513 29

説教 森田幸男牧師

昨日は大阪は十数年ぶりの大雪ということで、いつも欠かさず礼拝に出ておられる方の顔も、教会から遠い所ほど雪の積もりも多いし、今日も路面凍結という所もあって、お顔が見えないのは寂しいことでもあります。わたしは大阪に戻って来て、この春で満14年経っているのですけれども、帰って来てからは今回の雪が一番大雪だと思いました。十数年前は苦小牧にいましたから、この程度の雪は大雪とは言わないのですね。ちらちらと降ったという感じですから。苦小牧では夜の中に数十センチの雪が教会裏の駐車場に積もるので、だから牧師の朝一番の仕事はその雪かきをすることですが、私が雪かきのために庭に出ると、既に雪かきは終わっています。もと炭坑で働いていた小柄なお年寄りの会員が来て雪かきしてくれていたというのが殆どでしたので私は数えるほどしかしませんでした。私が大阪で思い出す大雪というのは、今から57、8年前、小学校の3、4年の時に大雪があって、あの時は20センチか30センチ積ったと、私の記憶ではそうなんです。今日はいつも竹村長老と神田長老が座っておられるその席に、わたしの小学校中学校の時の同級生が二人座っているのですが、大阪の大雪と言ったらその時のことを私は思い出しますが、どうでしょうか。人生には思いがけないことが起こるわけでもあります。

さて今日はイエス様の「十字架上の七言」の第二番目の御言葉を共に聞こうと思っておりますけれども、聖書を読むというのは本当に難しいことだと思います。その語られていることを本当に理解するということが、それは本当に難しいことだと思います。何で難しいかと言うと、そこで語られていることが人間の理解をはるかに超えることを、実は聖書は書いているからだと思います。けれども、そういうことですから、読む度に新しい発見があります。ですからこの難しい聖書を読むというのは、実に楽しいことでもあるのです。その難しさに挑戦して、期待を持って聖書に立ち向かうならば、聖書は応えてくれると思います。そして、私たちに新しい視野、今まで見たことのない景観、それを私たちに見せてくれる。そういうことですので、この難しさはいやな難しさではなくて興味津々というか、聖書は一体どこへ導いてくれるのかという思いをもってまた読める書物でもあります。

今申しましたようにこれはイエス様の「十字架上の七言」の第二番目の御言葉を今日と一緒に聞くわけですが、それは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」という御言葉であります。結論を先に申しますと、これは一緒に十字架に付けられた犯罪人の一人に語られた言葉でありますけれども、最近繰り返しこう申しあげています。聖書に書かれていることは実はわたしのことが書かれてもいるのだと。聖書に出てくる人物は、確かにノアであったり、アブラハムであったり、イサクであったり、ヨセフであったりするわけですが、それはその人の固有の物語を聖書は語っているわけですが、しかしその内面に入り込むと、同じ人間という観点でアブラハムなり

ヨセフなりを見るときに、別人ではなくて、私が抱いた疑問、私が行き詰まった行き詰まり、わたしが与えられた活路、そういうところをアブラハムも通っているということに気が付きますね。するとそれはアブラハムの人生でもあるけれど、わたしの人生でもあるというふうにだんだんと読めてくると思うのです。

あの有名な森有正という牧師の息子で哲学者、思想家であった彼は、「アブラハムの生涯」というのは、これは人間の人生の典型なのであって、アブラハムが歩いたところは、すべて人間たる者は例外なく歩むのです」と、『アブラハムの生涯』という講演の中で語っておりますけれども、わたしもそう思います。

それで今日は、その十字架上のイエス様と二人の犯罪人のやりとりのところを見るわけでありましてけれども、ご承知のように繰り返し聞かれていることでありますから、また、ということになりますけれども、十字架刑というのは当時、これは政治犯を処刑する死刑の仕方であります。ですから今日のところにも主イエスのほかに犯罪人が二人出てきますけれども、彼らもまた政治犯なのだということでもあります。ですから先週も見ましたように、この処刑の務めを負っている刑吏のローマ兵などにはこれは日常茶飯事なのです。当時ローマの街道には二千も三千もの十字架が立ち並んだということが書かれている資料もあるわけですから、十字架というのは決して珍しいことではなくて、日常茶飯事であったから、彼らにとっては退屈で仕方がない作業であったわけです。そしてそれは同時に広大なローマ帝国のいわゆるパックス・ロマーナ「ローマの平和」、これはローマの秩序と言ってもいいと思いますが、それを権力と脅しでその秩序を守るために、人を十字架にさらしたわけです。これはみせしめでもあるわけです。秩序を乱すものを葬るために十字架刑があったわけでありまして。

さてイエス様と共に二人の犯罪人も十字架にかけられましたが、39節を見ますとこうあります。「十字架にかけられていた犯罪人の一人がイエスをののしった。『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ』と、こういうふうに十字架にかけられながら彼はイエス様をののしったのであります。

ここに「メシア」となっているのはヘブライ語で、ギリシャ語では「キリスト」となります。日本では普通「救世主」とか「救い主」というふうに訳されていますけれども、当時、「メシア」というのは、神様が遣わしてくださる「政治的救済者」の意味です。つまり当時のイスラエルはローマ帝国の支配下にありましたから、ローマからの独立をイスラエルのために勝ち取ってくれる、神が遣わしてくださるイスラエルの王というふうな意で、「メシア」と言われておりましたし、イスラエルはメシアを待望する民であったわけでありまして。今もそうです。

それでイエス様の弟子も、また多くの人たちも、この人こそメシアだという期待を持って主イエスに従って行ったのでありますけれども、イエス様は捕らえられて十字架につけられるという期待はずれの結果になってしまったということでもあります。

そして時を同じく十字架にかけられた犯罪人の一人、政治犯ですが、イエスを罵って、「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と、この土壇場においてもなお悪態をついているということでもあります。この様子を読むときに、“この犯罪人はイエス様に対して何ということをするのか”とクリスチャンなら思うかもしれませんが、

ここにわたしは、彼の土壇場、ぎりぎりでの救いを求める叫びを聞く思いがいたします。「お前はメシアではないか」というこの言葉自身はいい言葉です。悪くはない。それなら何故こんなことにならないで、この国、イスラエルを、別の、もっと良い状態にもっていつてくれなかったのかということになります。

誰も人から罵られるような経験はしたくないと思いますけれども、人から罵られるというのは、これはこたえますね。けれども牧師をしていると、罵られるということは日常茶飯事と言えばちょっと言いすぎでしょうけれども、“偽善者”から始まって、“嘘つき”“お前みたいな嘘つき牧師は死んでしまえ”から“殺すぞ”と、そんなことは日常茶飯事なんです。ですからこの聖書をこだけ読むと、十字架にかけられながらなおイエス様をのしるなんて何ということだと思われるかもしれませんが、これくらいの罵りは大したことはありません。イエス様も、“悪魔・サタン”“ベルゼブルベ・悪霊の頭”などと、散々悪口を浴びせられてこられた方です。不肖の弟子、私も罵られつつ日々を過ごしているわけなんです。そういう経験もありますので、私はこの犯罪人の罵りの言葉を通して、必死になって救いを求めている叫びを聞く思いがしています。もう後がないわけですから、数時間か一日ぐらいで息絶えるわけですから、そのところで本当に救いを求める叫びを私は聞く思いがするわけであります。

私たち人間はぎりぎりのところに追い詰められると何を言うかわからないのです。普通の状態ではないわけですから。十字架にかけられているのですから。人間は死が近づいてきたとき、最後は思いがけないことを口走るわけですね。けれどもそういう思いがけないことの中に、やはりその人の本音がある。わたし達は表面の言葉にまどわされることが多いのですが、その言葉の奥にその人の必死の叫びを聞く時に、表面的にどんなひどい言葉を浴びせられてもたいしたことはないと思います。

しかし、40節を見ますとこうあります。「すると、もう一人の方がたしなめた。『お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。』」同じ十字架にかけられていながら、この右と左、かくも対照的に違うのかと思う姿であります。

しかしこれも表面的に見ると、右と左、本当に対照的です。けれども二人の内面に分け入って行くと、右も左も一つの人になっていく。そういう可能性があると思います。

イエス様は先週読んだところでは、とりなしの祈りをされました。34節、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と、こういうふうにイエス様はとりなしの祈りをされました。これが十字架上の七言の第一でありましたけれども、そういうイエス様の姿の中に、この人は「神的なもの」、「やはりこの人は神から遣わされたメシアだ」と感じた。普通の意味での、政治的メシア待望という立場で、この二人の犯罪人も、正義のために、解放のために自分を献げて来たわけですね。並ではないから、一般市民以上の行動をとったから、捕まって十字架にかけられるということになるわけですが、このイエス様の中に、通常自分が考えていたメシア像を破るようなメシアの存在を、彼は感じたのではないのでしょうか。

ですから彼は、「お前は神を恐れぬのか」とたしなめます。同じ刑罰を受けてはいる。こういう刑罰を受けたのは、我々は自分のやったことの報いを受けているのだから、当然

だと言います。いずれにせよ、十字架刑という刑罰を受け入れるというのは容易なことではないと思うんですね。どんなたちの悪い犯罪を犯した人でも、やはり自分を主張できる部分がゼロという人はいないと、私は思うのです。けれどもこの犯罪人は、その死刑をも自分のやったことの報いを受けているのだから当然だというふうに、彼は死刑を受け入れているわけであります。これはちょっと稀有な例だと言ってよいと思います。

というのはどうしてかという、やはり私たちは通常の正義感というのがあります。「善」というのがあります。それからするとこの犯罪人たちは我々に理があると。けれども権力に押しつぶされたのだと、こういうことでもいいと思うのですけれども、その通常の価値観とか、基準で測るのではなくて、隣に一緒に十字架にかかっているイエスというこの人物のその言動が、この人にとっては新たな基準になったわけです。その基準からすると、自分は正に犯罪人だ。死刑になるのが当然の犯罪人だというふうに彼は受け入れていると思います。「しかしこの方は何も悪いことをしていない。」こういうふうにしてイエス様をなお罵っているのは、もう一人の仲間かもしれませんけれども、彼をたしなめているわけであります。

今日もそれを読むことができませんから、皆さん、お帰りになったら是非読んで頂きたい詩編を二つ申し上げます。一つは90篇です。もう一つは139篇であります。90篇は今週の水曜日の聖書を読む会で読もうと思っていますけれども、90篇の冒頭はこうです。

「主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。

山々が生まれる前から 大地が、人の世が、生み出される前から
世々とこしえに、あなたは神。」

こういうふうになる詩編なのです。もう一つの139篇、これは「神の遍在」がテーマの詩編です。「遍在」、つまり、“いつでもどこにも神はいます”ということ、その信仰で全篇満ちているのですが、今の関連で申し上げたいところは、13節以下のこんな箇所です。

「あなたは、わたしの内臓を造り

母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

わたしはあなたに感謝をささげる。

わたしは恐ろしい力によって

驚くべきものに造り上げられている。

御業がどんなに驚くべきものか

わたしの魂はよく知っている。」

こういう行(くだり)があるのです。この139篇の作者は、自分一個の存在の神秘というか、驚くべきものに神によって自分が造られている。神の恐ろしき力、とてつもないと言うか、比べようのないその力によって、驚くべきものに自分は造り上げられていると言います。神の御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている、こんな風に言うわけです。何を申し上げたいかという、今日の箇所の関連で何故ここかと言いますと、今イエス様とこの二人の犯罪人は、人生の極限にあるわけなんですね。イエス様もこの後2、3時間で息絶えられる。そういうぎりぎりのところの、いわばドラマを私たちは今見ている感じになるわけですけれども、そのぎりぎりのところで一体何が起きているのか。それも驚くべき事実が起きているわけなんですね。本当に人間は一瞬にして認識

がガラッと改まることがあるのです。

そのように一人の人間の存在が秘めている神秘は、もう計りがたいものがあるのだということはこの詩編の作者は言っているわけですね。実は、私たち一人一人がその様な存在なのだということはこの詩編作者は言っているわけです。そういうイエス様もここでは人間イエス様ですが、それと2人の犯罪人と3人なんです、この十字架上の三人の遣り取りが表現している凄さには本当に大変なものがあると思います。

42節に戻りますが、彼はもう一人の犯罪人をたしなめました。そして今度はイエス様の方に向かって、「イエス様、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と、彼は言います。イエス様に対する懇願、嘆願であります。「わたしを覚えてください。」一緒に天国へ連れて行ってくださいとは言わないのです。「あなたが本当に王として、御国においでになるときは、わたしを思い出してください。」「思い出す」というのは「覚える」ということです。心の片隅にでもわたしを覚えて、記憶に留めてくださいと、ものすごい嘆願ですけれども、本当に謙虚です。ささやかながら真実、真剣な祈り願いを彼はいたしております。死刑になるのも当然だという、彼はそういう極悪人の自覚なんです。そういう者でありますけれども、どうかこのわたしを覚えてくださいと、痛切な願いを彼はいたしております。

ですからこの時には彼は死刑で十字架にかけられており、その痛み苦しみは想像を絶しているわけですけれども、ここではもうそれさえもどこかに消えていますね。こんな正に神的と言うべきか、メシアと言うべきか、どう表現していいのか、もう彼は言葉を失っているわけですけれども、このような存在が、世の誰よりも自分の近くにおられるという、そういうことを彼は全身で感じたのではないのでしょうか。そして彼は、自分の人生が無駄ではなかったことを悟る。自分がこれこそ正義と信じて全身全霊をかけて来た戦いには敗れた。そして死刑になったけれども、自分の人生は決して無駄ではなかったということを、彼は本当に十字架で、他のすべてを、一切を忘れるような思いで、人生の幸いを身に感じたのではないのでしょうか。

こういう言葉があります。これはゲーテの言葉で、それをユダヤ人のあのヴィクトール・フランクルという、アウシュビッツから生還した精神科医が引用している言葉なのですが、こうです。「人間は苦難に耐え得ないのではない。苦難の意味が分からないことに耐え得ないのだ」という言葉です。本当に私たちは、思いがけずいろんな降って湧いたような苦難に直面するわけです。その時は慌てふためくし、わけが分らなくなるのですけれども、それでも人間はあらゆる苦難に耐えることができる。というのは、今この犯罪人は十字架にかけられるという、そういう極端な苦難と言ったらいい状態に、人生の最後にぶつかっているわけですね。けれども今彼は苦難の意味を発見したのではないのでしょうか。イエスという存在を間近に見ることによって。その時にそれは苦難なんだけれどもその苦難から解放されたように、その苦難の只中に自分を回復してしゃんと立って、自分の小ささも認めながら、しかし「わたしを覚えてください」と言う、この彼の嘆願が持つ意味というのは、本当に深く、広いと思います。するとイエス様は、「はっきりしておくが、今日(原文だと今日というのが頭にきます。)わたしと一緒にあなたは樂園にいる」とこういうふうに使われまして。明日ではない。やがてでもない。今日なんです。

「楽園」というのは、これは「パラダイス」という言葉です。これは「王様の庭」なんですね。王様が自分の心に適う者を招いて、そこで宴を開いたり、共に散策する、そういう王の庭を「パラダイス」と言ったようです。これはペルシャ語だということです。旧約聖書でアダムとエバが最初に置かれたのは、エデンの園と言いました。その「エデン」を「パラダイス」というふうにギリシャ訳のときに言い換えたのですね。エデンというのは、「喜び」とか「楽しみ」とかという意味のヘブライ語です。ですからエデン・パラダイスを「楽園」というのは、いい訳だと思います。

ですからこの犯罪人がこの認識に至った、その日、その時、それが実は楽園なんですね。十字架にかかっているのだから苦しくないはずはありません。イエス様との出会いの中でその痛み、苦しみからさえ抜け出て、喜びというか楽しみというか、今まで気がつかなかった世界が開けたと思うんですね。それで初めに申しましたように、これらの言葉というのは、イエス様と彼の二人の遣り取りでありながら、また私たちの遣り取りでもあります。わたしは以前からずーっと、イエス様を中心にこの二人が右と左に同じ距離にいるのに、イエス様に対する態度のこの対象的な違いは、何で起こるのだろうか。同じものを見たら、同じ反応が起こってもよさそうですよね。ところが、そうはならないのが、人間なんですね。一人一人全部やっぱり違うんですね。過去も違うわけです。だからその違いがここに当然現れるわけですけども、そんなふうに私はこれまでこの二人を見て来ました。

よく申しますように、聖書に色々な人物が出てきますが、その後、その人はどうなったかということは、聖書は書いていません。今日の箇所ではこの人は、「今日あなたはわたしと一緒に楽園にいる」とイエス様から言われたわけです。それならば、イエス様を罵っていた人はどうなるのでしょうか。そのことは聖書には書かれていないわけですね。でもわたしは、こちらのイエス様を罵っていた方が気になって仕方がないのです。最近よく罵られるものですから、こちらの方が気になるのです。それでたしなめた人も確かにたしなめたのですけれども、彼の自覚の中にこういうこともあったと思うのです。たしなめてはいますけれども、このイエス様を罵る姿は、自分の直前の人の姿でもあった。彼も直前まで、口に出したかはともかくも、正義のために戦ってきたということでやってきて、こんな目になってということで、苦難の意味ということは彼も理解できないでいたときには、内心の怒りをどこかに向けないと人間おさまらないですね。だからイエス様を直前の彼も罵っていたであろうと、わたしは想像するわけです。けれどもそれは変わるわけですね。そして今彼はもう一人をたしなめる人になり、イエス様に嘆願する人に彼は変わっているわけです。一方聖書は、このイエス様を罵っているこの人のこの後の姿を書いてはいません。しかし、聖書が書いていない彼の後の姿は何かというと、彼をたしなめた人が持っている理解に、彼もまた変わって行く可能性というのはあるわけです。先ほど、この対象的に見える二人は、二人にして一人だと言った意味は、そういうことでもあります。右の人は左の人の直前の姿、左の人は右の人の直後の姿、そうであるならば、この犯罪人は二人なんですけども、二人であって一人なのであります。

ですから、そういう意味でわたしは、イエス様が語られた言葉、「はっきりしておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた言葉を、ここで一字だけ変えました。「はっきりしておくが、あなたも今日わたしと一緒に楽園にいる。あなたもというのは、

イエス様をののしっている人に対してであります。なぜならイエス様の十字架上の第一の祈りは、とりなしの祈りでありました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と、イエス様はつい前にお祈りされたばかりですね。この執り成しの祈りのなかに、この罵っている人は、わたしを罵ったから入れませんか、入っていませんとか、そんな狭い見でイエス様はお祈りはしておられないわけです。ですから、「あなたも今日わたしと一緒に樂園にいます。」ですからイエス様はこの二人を、全く同じ思いと眼差しで見られておられると思います。

この「はっきり言うておくが」というお言葉なんです、が、「はっきり」というのは、「アーメン」という言葉です。これはヘブライ語で「然り」「そうです」という意味で、讚美歌の後お祈りの後で、「アーメン」と唱和しますのは、今歌った内容、祈られた内容について自分も同意ですと、賛同の意を表す言葉が「アーメン」なんです。これは確かな同意、確信を表しています。

京都に私たちの日本キリスト教会の教会が二つあります。京阪で行って、丸太町で降りて歩いてちょっと行ったところに、「吉田教会」があります。京阪中之島線が開通すれば、吉田教会や、香里園教会は近くなりますね。今年の秋、十月には開通します。

もう一つは、金閣寺の近くに「西都教会」という教会があります。西都教会の講壇の前だったかに聖書の言葉が書かれています。会堂の飾りはそれだけだったと思います。何と書いてあるか。聖書の言葉をギリシャ語のままで書いてあるのですが、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」これはイエス様がおっしゃった言葉です。ルカによる福音書 21 章 33 節にありますね。そして今約束の言葉を語られるときに、「アーメン」とこうおっしゃったわけですね。

私たちは天地が滅びるといのは、余り実感が無いわけですがけれども、最新の宇宙物理学によると、地球が消えて無くなるのは、50 億年後のことだそうです。これはわたしが最近読んだ本に書いてありました。東大の教授で、松井孝典さんと言う、宇宙惑星物理学が専攻だと書いてありましたけれども、この先生が言っておられるのです。どういうふうにして地球は消えるかという、太陽がずーっと膨張するそうです。太陽が膨張してきて、地球に大接近するそうです。するとこの地球が溶岩のようにどろどろに溶けるそうです。そして全体が溶けて、ガスになって消えるそうです。そして銀河系宇宙に散っていくと。50 億年後にはそういうことになるそうです。

イエス様も、「天地は滅びる」と言われます。しかしそれに続いて、けれども「わたしの言葉は決して滅びない」とこういうふうと言われるわけであります。50 億年後のことは想像も付きません。しかしわずか 100 年後にも私たちはもういません。ヒヨリちゃんは、まだ 1 歳になっていませんから、ひょっとしたら長生きしているかもしれませんが、私たち大人はいないわけです。近々私たちも亡くなって行きます。

けれども、『アーメン。今日あなたはわたしと一緒に樂園にいる』という、このイエス様の約束の言葉は滅びないわけです。決して消えないわけです。そう言われるイエス様に、私たちは説教を通して結ばれるわけです。私たちの人生にはいろんなことにぶつかりますけれども、この一事は揺れ動かないのです。この不思議に出会うところに神によって造られた一個の人間存在の、宇宙大の不思議と意味があるわけですね。我々はイエス様の約束

と言葉と一つになって、滅びることはありません。崩れはしません。

ですからイエス様を罵った人も、死んでも朽ちないもの、すべてが無になっても崩れない言葉を聞いているわけです。彼は、表面的には罵っていますけれども、ある意味で彼はわれわれ人間代表です。その彼が、「何が救いなんだ。すべては変わり移り行き、そして地球も滅びるけれども、滅びないものは何なんだ」ということを彼は本当に土壇場のところで問っている。そういう意味ではあなどっている人は、私たちの代わりでもある。そしてイエス様の約束を直接聞いた人、これもまた私たちの代わり、代表なのです。

ですから私たちはいろんな局面で「アーメン」とこう言うわけですがけれども、イエス様はこの約束の言葉をおっしゃる冒頭で、「アーメン」とおっしゃったわけです。何が崩れても、これは確かだ。これは確かなんだということですね。存在をかけて私たちにも語ってくださる。そういうことですので、私たちも人並みにいろんな試練に思いがけず直面して、もう立ちゆかないということもあります。けれどもその苦難には意味があるわけですね。ですから、それさえ私たちがつかめば、何が起きててもどうってことはないのです。

勿論その意味をつかめないままで死ぬことだってあるわけです。そうしたら間に合わなかったということになるように私たちは思いますけれども、そんなことはありません。今日も一緒に告白しました使徒信条では、イエス様は「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、」とあります。「陰府」とは、死人が行く世界のことで、「陰府にくだり、三日目に復活された」とこういうふうにあるわけです。死んで葬られるまで、こういう理解、信仰を持たないで死ぬという人はいくらもいるわけです。勿論この信仰の世界に一日も早く目覚めるほど幸いなことはないのですけれども、皆が皆そうはいかないわけです。けれども間に合わないわけではありません。イエス様はその陰府にもくだって行かれる。何しに行かれるのか。宣教に行かれたと、ペテロの手紙一の3章に書かれています。ですから信仰に入れられるのに遅いという時はないのです。しかし、だからこそ。この信仰の世界には誰もが一日も早く入れられることが願わしい。それはイエス様の願いでもまたあると思います。「今日わたしと一緒に楽園に、あなたも」。これがイエス様の約束であり、招きの御言葉であります。

祈ります。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

まことに至らぬことの多い者でありますけれども、あなたがこのような者に生を与え、そしてあなたの限りない祝福に導き入れんと、常に共にいまして導いて下さることをまた覚えて感謝いたします。

どうかすべてのことの中にあなたの善き御心のあることを、私たちが日々新たに見い出しつつ、あなたの備えたもう祝福、約束、楽園へと歩みを進めることができますように、変わらず守り導いてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。アーメン